

「んぶっ！」

「ふふっ、優斗、コレ好きなのよね？ わたしのおっぱいに顔を埋めてむにむにされるの、大好きだもんね」

乱れた優斗の髪を優しく撫でながら、そっと両脚を開く。自分で水着の股部分を横にずらし、すっかり準備の整った秘口をあらわにする。

優斗の股間に手を伸ばし、熱く脈打つ肉棒を濡れた膣穴へと導く。

「わたし、もう我慢できないから。優斗のオチン×ン、食べちゃうわね」

「んん……んんっ!？」

顔を左右から乳房に挟まれた優斗がなにか言おうとしたが、瑛里華は無視した。自分が好きなように瑛里華を抱きたかったのだろうが、もう遅い。

(だってわたし、まだ一度しかイッてないんだから……っ)

昼間のことでヤキモチを焼いて水着姿にさせられたのはかまわないが(そんな弟を可愛いとも思う)、あんまり焦らされるのは瑛里華の性に合っていない。なにより、ヤキモチを焼いていたのは瑛里華のほうが先だったのだから。

(電車のなかであんなにデレデレしてたクセに……勝手なんだから、優斗はっ！)

あのととき、自分のことを「恋人」と紹介してくれなかったことが今日一日、ずっと

胸の内でもやもやしていたのだ。だからビーチでは挑発的なこともしたし、エステだつて行った。露天風呂では恥ずかしさを我慢して、弟に身を委ねた。

（だから今度はわたしの番よ。お姉ちゃんがいっぱい、可愛がつてあげるからね！）  
ぬる……ぬぷっ！

期待に潤んだ蜜穴は、すんなりと優斗の勃起を呑みこんだ。愛液で満たされた泉の最奥まで一気に到達する。

「ンンンンーっ!!」

両手で優斗を胸に押しつけながら、歓喜の声をあげる瑛里華。水着に包まれた半裸の身体が艶やかな桃色に染まっていく。

「あつ、イイ……優斗のおチン×ン、奥に届いちやつてる……あつ、ああんっ」

「んぐっ、ぐぐっ!？」

胸に挟まれて息ができないのか、優斗がうめくが、もう瑛里華の耳には届かない。あわただしく水着を脱ぐと、巨大な肉塊で優斗の顔を包んだまま、胎内の奥深くまで埋没した肉竿の熱さに身震いをする。

「うああつ、すごい……優斗のおチン×ン、オマ×コの奥に届いてる……あつ、そ、そこお……あはん、ダメ、当たってる、わたしの子宮に届いちやつてるう！」

両脚で優斗の腰をがっちりロックする。これ以上ないくらいに弟の体に密着しながら、瑛里華はもどかしげに腰を揺すった。

「ほ、ほら動いてっ！ 優斗、早く、早くオマ×コいじめてよお！」

姉の懇願が耳に届いたのだろう、優斗が双つの柔肉に顔を埋めこんだまま、健気にも腰を使ってきた。今夜だけでもう二度放っているが、若い勃起はむしろこれまでに上に硬く、熱を帯びていた。

「そ、そうよ、そのまま、そこ、オマ×コの上のところ、擦って！ あっ、そこ、イイ……オチン×ンのエラで擦れて、感じるの！ アアッ、はあん！」

瑛里華は目を閉じ、恍惚とした表情で喘ぐ。優斗のリズムに合わせて腰を振り、より深い結合を求め。

こりこりとした子宮口が亀頭につぶされ、大きくエラを張ったカリ首に膣襞を削られるたびに目の前に真っ白なフラッシュが焚かれる。

「ね、姉さん……ああっ、好きだ、おれ、姉さんのこと、大好きだよ！」

いつの間にか乳房から脱した優斗が唇を押しつけてきた。

「んぶっ……ちゅぶ……くちゅ……んう、ん……ンンン……こくっ……こくっ」

侵入してくる優斗の舌を受け入れ、つづけて流しこまれてきた唾を音をたてて嚥下



する。そうかと思うと逆に舌を吸われ、無理やりに唾液を吸られてしまう。

粘膜が激しく擦れ合う結合部からはぐちゅぐちゅと淫らな音が聞こえてくる。溢れた本気汁が肛門まで垂れ落ちているのが自分でもはつきりと感じられる。

(やだ、わたし、感じてる……いつもよりずっとずっと気持ちイイ……っ)

普段と違う環境のせいかな、背中を這いあがってくる快感の質が鋭く、それでいて深い。子宮のあたりに重々しい感覚がある。

「ね、姉さん、キツイ……アソコ、ぬるぬるなのに痛いくらいに締まってるよっ」

「アンタだつて……優斗のおチンメンだつて、また大きくなってるじゃないの！ンンっ、け、削れる……わたしのオマ×コ、アンタの硬いので壊されちゃうう！」

だんだん舌がまわらなくなってきた。臉まぶたを開けているのも億劫おっくうになる。身体が浮きあがるような感覚と同時に、激しく擦られる膣道からは間断なく鋭い愉悦が襲ってくる。

「らめえ……そ、そんらに突いたら……オマ×コ、ダメになるう……わ、わたひ、浮いちやうよお……アツアツ……優斗……怖いよ、わたし、感じすぎて怖い……っ！」

今までに感じたことのない巨大な絶頂への恐怖に、涙が溢れてとまらない。ぶるぶると震える両腕を最愛の弟の背中にまわし、思いきり抱きしめる。